

《第3分科会》
現代の政治状況とアーレント

アーレント、マルクス、ポピュリズム
百木 漢（日本学術振興会特別研究員 PD・立命館大学）

2016年はポピュリズムが世界を席卷した年であった。米国大統領選におけるドナルド・トランプの勝利、英国の国民投票におけるEU離脱の決定、フランス大統領におけるマリーヌ・ルペンの躍進などがそれを象徴している。今日、こうしたポピュリズム現象を分析するにおいて、まず参照されるべき古典は、マルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』であろう。この著作では、ナポレオンの甥であるということ以外に特別の才覚を持たないルイ・ボナパルトが、王党派と共和派、ブルジョアとプロレタリアなどの対立を乗り越えて、第二共和政のもとで権力を掌握するに至った過程が描かれている。そのなかでマルクスが強調するのは、封建制の崩壊とともに誕生した零細自営の「分割地農民」たちがボナパルトを強く支持したということである。

彼らは、自分たちの階級利害を、議会を通してであれ、国民公会を通してであれ、自分自身の名前で主張することができない。彼らは自らを代表することができず、代表されなければならない。彼らの代表者は同時に彼らの主人として、彼らを支配する権威として現れなければならない。彼らを他の諸階級から保護し、彼らに上から雨と日の光を送り届ける、無制限の統治権力として現れなければならない。したがって分割地農民の政治的影響力は、執行権力が議会を、国家が社会を、自らに従属させるということに、その最後の表現を見出した。（『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』）

分割地農民たちは自分たちの階級利害を議会や選挙を通じて主張することができないために、「自らを代表することができず、代表されなければならない」。その結果として、本来彼らとは全く異なる階級に属するはずのボナパルトがその代表に選ばれ、「無制限の統治権力」として現れることになる。そこから「ナポレオンという名の一人の男が自分たちにすべての栄光を再びもたらすという、フランス農民の奇跡信仰が生まれた」という。こうして自分たちの声を代表・代弁する存在を、既存の政党・政治家に見出せないために、その反動として本来は彼・彼女らと正反対の階級に属するはずの俗物的な人物が熱狂的に支持されてしまうという構図は、今日のポピュリズムにおいて生じているのとはほぼ同じ構図である。

マルクスはこうした分割地農民をルンペンプロレタリアートに属する存在と見なし、「反革命の温床となる」「信用ならない」人々として捉えていた。ルンペンプロレタリアートとは無産階級や労働者階級のなかでも革命意欲を失った極貧層であり、「なんで生計を立てているのかも、どんな素性の人間かもはっきりしない、おちぶれた放蕩者とか、ぐれて冒険的な生活を送っているブルジョアの子弟とかのほか、浮浪人、兵隊くずれ、前科者、逃亡した漕役囚、ペてん師、香具師、ラツァローニ、すり、手品師、ばくち打ち、ぜげん、女郎屋の亭主、荷かつぎ人夫、文士、風琴ひき、くず屋、鋏とぎ屋、鋳かけ屋、こじき、要するに、はっきりしない、ばらばらになった、浮草のようにただよっている大衆、フランス人がラ・ボエムと呼んでいる連中」など

をまとめて指す概念だとされる。

「あらゆる階級の屑、ゴミ、残り物」とマルクスが表現した、このルンペンプロレタリアートに関する記述から想起されるのが、アーレントが「モップ mob」と呼んだ人々の存在である。彼女によれば、モップとは19世紀の西欧諸国に現れた商人・山師・やくざ者・ごろつきなどを含んだ「全階級、全階層からの脱落者の集まり」(ET, S.347-348, 二55頁)であり、「増大する工業労働者とも、…下層の民衆とも同一視されるべきではない」存在であった。階級社会からも国民国家からもはみ出した「余計者」であったこれらのモップたちが、帝国主義的膨張の尖兵役を担い、一獲千金を求めてアフリカ大陸へ乗り込んでいくことになったことをアーレントは論じている(『全体主義の起源』第二部)。

興味深いことに、アーレントもまたモップを「社会の余計者」および「社会の廃棄物」と呼び表し、次のように述べている。「彼らは市民社会が窮屈すぎるとして自分から飛び出したのではなく、市民社会から吐き捨てられたのである。彼らはこの社会の文字通りの廃棄物(refuse, Auswurf)だった」。資本主義発展の副産物として、「人間の廃物」として社会に打ち捨てられ、国家から吐き捨てられた存在であったモップたちこそが、新天地を求めて帝国主義を先導し、その植民地先において人種主義 racism に基づく支配体制を生み出していくことになったのである。

加えてアーレントは『全体主義の起源』第一部「反ユダヤ主義」のクライマックスを締めくくるドレフュス事件について記した章で、モップが反ユダヤ主義の積極的な支持層となったことを指摘しながら——「モップが憎むもののすべてがユダヤ人のうちに体现されていることは明らかだった」——次のように述べている。

モップはあらゆる暴動の際に自分たちを指導しうる強力な人間のあとについていくのである。モップは選ぶことができない。喝采するか投石するしかできないのだ。だからモップの指導者たちは、近代の独裁者たちがそれによって素晴らしい成果をあげたあの人民投票による共和政を投じすでに求めた。モップは自分を締め出した社会と、自分が代表されていない議会を憎んだ。第三共和政の社会と政治家は、短期間に相次いで起こるスキャンダルや詐欺事件のうちにフランスのモップを作り出してしまったのである。

「主として零落した中産階級から成っていた」こうしたモップたちの「喝采と投石」もまた、今日のポピュリズムにおいて、中間層から没落しつつある労働者たちが、かつての栄光を求めて、スキャンダラスな「強い指導者」を担ぎ上げ、愛国的・排外的な主張に染まっていくのとほぼ同様の構造をもつものではないだろうか。マルクスが提起したルンペンプロレタリアートと、アーレントが提起したモップの概念を手掛かりにしつつ、今日のポピュリズムとその先にある全体主義の危機について本報告で考察していくことにしたい。